

臨海部から日本の再生を ～新しい「みなとづくり」と「みなとまちづくり」で新機軸を拓く～

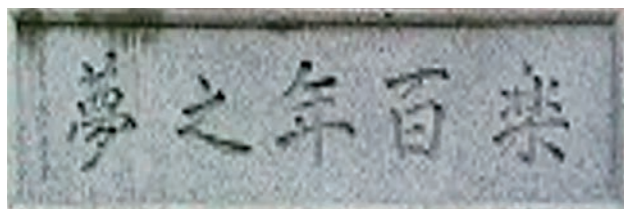
歴史を創った土木プロジェクト

近年の日本の状況を鑑みると、平成は停滞した30年でありましたが、令和の時代には何とかこの淀んだ空気を変えたいと多くの技術者は思っているはずです。

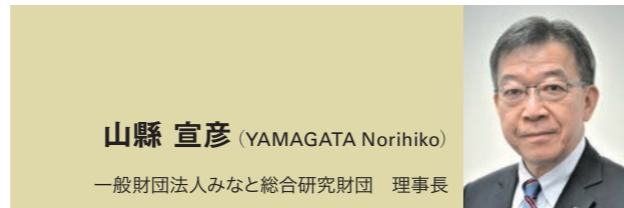
明治の技術者は日本の近代化を進めるべく多くの土木プロジェクトを成し遂げました。そうしたものの一つに琵琶湖疎水があります。東京に遷都され、京都の将来に危機感を持った北垣国道知事が構想し、若き田邊朔郎技師が設計監督した灌漑、上水、水運、発電の多目的プロジェクトです。この事業無くして今の京都の繁栄は無かったと言っても過言ではありません。当時、北垣知事が読んだ漢詩に「楽百年之夢」という一節があり、今でもその扁額が琵琶湖疎水記念館に残されています。危機感を持ちつつ、一方で百年の夢を楽しみながら壮大な構想を練ることの大切さを感じます。

ビッグピクチャーを描く

2022年土木学会では「Beyondコロナの日本創生と土木のビッグピクチャー」という提案を発表し、現状のインフラへの危機感とあるべき姿を示しました。一方、建設コンサルタンツ協会においても地域ビジョン作成等の活動が行われており、西日本の4つの支部では連携して「西からつくる、未来のカタチ」というビジョンを作成し、提案活動も開始されました。この広域ビジョン策定を指導した松江工業高等専門学校の天津宏康校長のコメントとして、エンジニアリングファーストで夢のあるビジョン創りができたことの意義と、作業過程において忘れかけていた志を思い出させる場となったことに、意識の活性化の重要性を強調されていたのが印象的です。



琵琶湖疎水記念館地階のトンネルの扁額



山縣 宣彦 (YAMAGATA Norihiko)

一般財団法人みなと総合研究財団 理事長

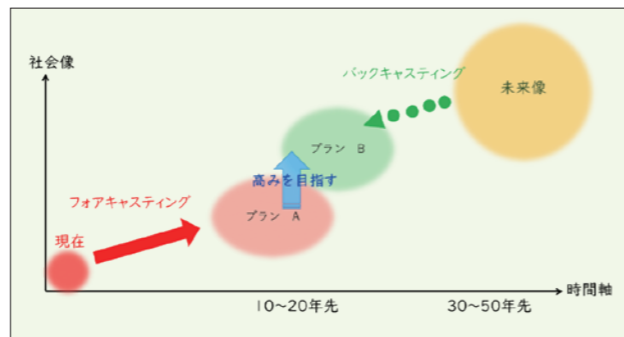
1954年生まれ。京都大学工学部土木工学科卒。1977年4月、運輸省(現国土交通省)入省。北九州市港湾局長(現港湾空港局長)、国土交通省大臣官房技術参事官(港湾)、国土交通省港湾局長を歴任。退官後は三井住友海上火災保険株式会社顧問、一般財団法人みなと総合研究財団理事長、一般社団法人建設コンサルタンツ協会理事など。

バックキャストによるビジョン作成の勧め

ビジョン作成には、現状を前提に課題解決型で将来像を描く手法(フォアキャスト)と、例えば50年後といった長いスパンでの望ましい未来像を考え、逆算的に考えていく手法(バックキャスト)があります。閉塞感のある現状を考えると、その打開にはバックキャスト手法で考える方がより夢のある構想になると考えます。大胆な発想で考え、一方でその地域の歴史や風土も考えながら構想することが必要ですが、そのためには、技術者の感性も求められています。

新しい「みなとづくり」と「みなとまちづくり」

臨海部には無限の可能性がありますが、しかし、現状は経済状況の足踏みもあり、一時は一世を風靡した工業地帯や港湾施設は、一部を除き革新的な再編もなく現在に至っています。今こそ望ましい姿の「みなと」や「みなとまち」を展望し、夢のある構想を打ち出す必要



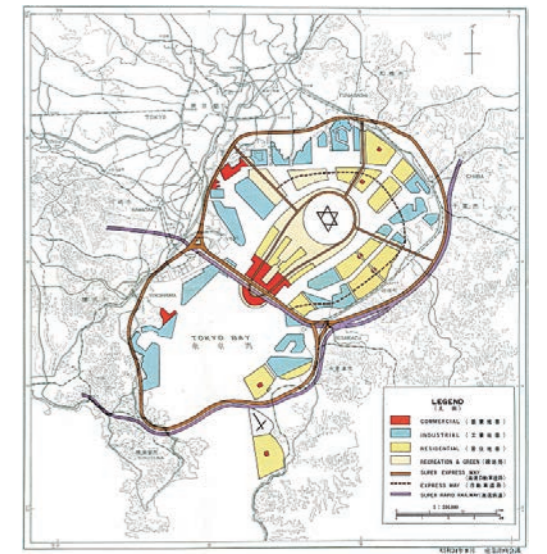
フォアキャストとバックキャスト



グレーター那覇みなと大改造構想



沖縄・奄美クルーズ・アイランド開発構想



NEO TOKYO PLAN 1959

グループによる「NEO TOKYO PLAN 1959」や丹下健三グループの「東京計画1960」等、奇想天外なビジョンが打ち出されました。図に示された通りにはなっていませんが、現在の京浜港と京浜工業地帯はその延長線上にあったと言っても過言ではありません。

カーボンニュートラル社会の実現、地政学的リスクを許容できる社会、安寧都市の創造等々、今こそ「100年の夢を楽しむ」思いで、そして知性と感性を働かせて、次世代の臨海部開発を夢見たいものです。

感性を大事にしたプロジェクト創り

今回の特集は「香り」です。「五感で感じるインフラ」というコンセプトは以前から面白いテーマだと思っていました。2019年にシンガポールのチャンギ空港にできた「ジュエル」と呼ばれるショッピングモールの庭園は、資生堂が企画する香り等をコンセプトにした仕掛けが施されています。「香り」「サウンド」「眺め」で利用者の安らぎ感を醸成するというものです。

以前私が携わったサンポート高松のプロジェクトでは、景観のみならず、波の音、夜間照明等々五感を意識した工夫や細工を施しました。この場所は今でも市民の憩いの場として定着し、最近では、瀬戸内国際芸術祭の起点としても賑わっています。今後も、会員各社においては、感性を大事にしたプロジェクト創りにも大いに挑戦して欲しいものです。

<参考文献>

- 1) 山縣宣彦 「港湾の新たな空間的価値を創造する取組み」 雑誌「運輸と経済」平成30年11月号 交通経済研究所
- 2) 山縣宣彦 「新しい「みなとづくり」と「みなとまちづくり」の展望」 雑誌「港湾」令和4年6月号 日本港湾協会
- 3) 山縣宣彦・加藤一誠 (編著) (2020) 「みなとのインフラ学」 成山堂書店

性を感じています。

そこで、沖縄を例にとって展望してみたいと思います。沖縄の未来像としてクルーズを中心とした観光振興を位置づけます。「世界のクルーズ王国沖縄」とするために、那覇空港と那覇港一帯を人流のエリアとしてクルーズターミナルやMICE(ビジネスイベント)施設等を配置し、物流を中城湾港エリアに集中させます。このグレーター那覇みなと大改造により沖縄・奄美クルーズ・アイランドを形成しようとするものです。これは現状を大幅に変えることとなりますので、ステークホルダーの理解を得るのは一筋縄ではいかないかもしれません。しかしながら、地元経済界からの支持もあり、一つのビジョンとして大いに議論していただきたいと思っています。

100年越しの夢を持ち、臨海部から日本の再生を

日本は今、危機的な状況にあります。経済的にも地政学的にも困難な課題に直面しています。こうした時期であるが故に新機軸を打ち出さなくてははいけません。臨海部は発想を変えて感性を働かせれば、壮大な構想を打ち立てることも可能です。東京湾では、60年前に民間